## 池 下 古 墳

## 調査の経過

池下古墳は名古屋市守山区小幡字池下に所在する前方後円墳である。周囲には茶臼山古墳・長塚古墳などの前方後円墳があり、これらと共に小幡古墳群を形成している。古墳群は庄内川と矢田川にはさまれた小幡台地とよばれる洪積台地上に立地している。

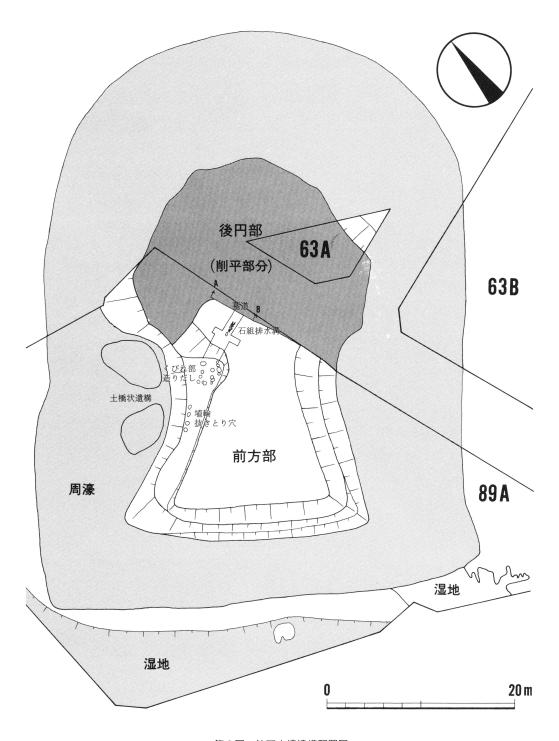
池下古墳は道路建設により昭和19年に後円部が破壊され、さらに昭和41年に一度発掘調査がおこなわれている。昭和41年の調査では円筒埴輪・朝顔形埴輪・蓋形埴輪が墳丘裾を

めぐり、くびれ部造りだしからは須恵器の甕・子持高杯・高杯、鉄鏃などが出土している。今回の調査は名古屋環状2号線の建設によるもので、昭和63年度より発掘調査をおこなってきた。昨年度の調査では池下南古墳(直径約18mの円墳)および池下古墳の後円部(63 A区)と周濠の一部(63 B区)を検出した。本年度は池下古墳の後円部の一部と前方部そして周濠を調査した。(89 A区)。



池下古墳全景





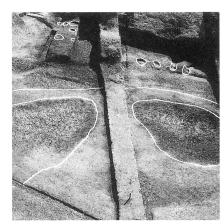
第2図 池下古墳遺構配置図

遺構 池下古墳は北側の丘陵から派生している低平な尾根の先端に、墳丘の主軸を尾根の 方向に直交させて築いている。墳丘は地山を削りだして前方後円形の基底部を築き、そこから二段築成に盛土をほどこしている。規模は基底部ではかると全長約42m、後円部径約30m、前方部幅約26mである。周濠は墳丘の周囲を盾形にめぐる。きわめて浅く、底面のレベルが一定せずに南側では湿地に接しており、滞水の痕跡はない(第2図)。

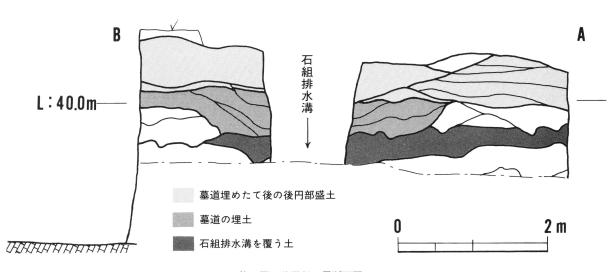
後円部の大半はすでに削平されているため、 埋葬施設そのものは残っていないが、後円部 の中心付近からくびれ部にむかって石組排水 溝が遺存していた。この排水溝は暗渠で黒色 の砂質土で覆われている。次に埋葬施設に付 属するものとしては墓道の存在がある。後円 部土層断面の検討により、石組排水溝を覆う 黒色土の上に、浅くU字形に落ち込む土層を 確認した(第3図)。埋土は後円部の盛土と共 通する黄褐色の粘土で、なかに細かい土器片



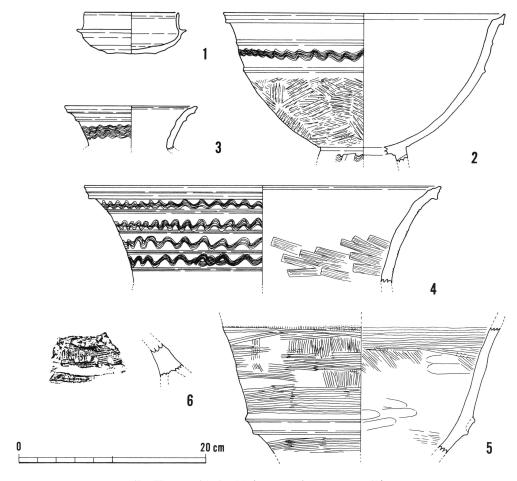
石組排水溝検出状況



土橋状遺構検出状況



第3回 後円部土層断面図



第4図 出土遺物実測図( | ~ 4 須恵器、5・6 埴輪)

が多くまじっている。これは、横穴式石室の羨道部先端からさらに墳丘外へつうじる墓道とよばれる施設で、初期の横穴式石室にはしばしばみられる。池下古墳では、墓道を埋めたてたのち、さらに後円部の盛土がなされている。また、周濠内でくびれ部造りだし付近のみ一段深く堀りくぼめており、その中央を土橋状に削り残している。これは、周濠外と墓前祭祀がおこなわれた造りだしをつなぐ「道」のような施設と考えられる。

遺物 須恵器・埴輪などがある。須恵器は杯身(1)・器台(2)・壺(3)・甕(4)などで、埴輪は円 筒埴輪のほかに朝顔形埴輪(5)・蓋形埴輪(6)が出土している。須恵器には尾張旭市城山2号 窯の製品があり、年代的には5世紀末から6世紀初頭頃に属する。

まとめ 茶臼山古墳が名古屋市教委の調査により、6世紀中葉に築造されたことがわかったため、池下古墳は小幡古墳群のなかで最も古い前方後円墳となった。また、墓道の検出により、埋葬施設は横穴式石室であったことが確定した。ゆえに、池下古墳は尾張で最古段階に属する横穴式石室墳のひとつであることがあきらかとなった。 (樋上 昇)